（ＡＬＳ患者嘱託殺人事件が問うもの：下）わたしたちが生きる意味とは　清水哲郎さん・ドリアン助川さん

会員記事

2020年9月9日 5時00分

シェア　ツイート list　ブックマーク 0　スクラップ　メール　印刷

清水哲郎さん

体が不自由であっても、なくても、「生きる意味」を見失いそうになることは誰しもあり得ます。生きる意味とは、それを受け入れる社会とは。命について考える２人に聞きました。

■「切り捨てない」を実現する一員　岩手保健医療大学長・清水哲郎さん（７３）

「死にたい」。今回の事件のように、そう言う人がいたら、そのまま死なせますか。

報道の限りでは、起訴された医師たちは、本人が生きる道を考えず、ただ死への道を肯定し推し進めたようです。「身の回りの世話をしてもらうようになったら、死を選ぶのはもっともだ」という価値観の人は、医療・ケアの従事者には不適格です。現在の日本社会が認める価値観から外れているからです。

厚生労働省 の研究班に参加した縁で、ＡＬＳ（筋萎縮性側索硬化症）患者の人たちと２０年来の交流をしています。ある方は 人工呼吸器 を着けて３０年ほど、国内外の患者や医療・ケア従事者と交流し、行政を動かしたこともあります。

難病の人も社会の一員として生き続けることで、社会の役に立っています。この社会を現に、誰一人として切り捨てない社会にするからです。「色々できなくなったら、死にたいのは無理ないよ」と妙に同情的な価値観が支配的になれば、今は元気な人も、老いて色々できなくなれば切り捨てられる不安を抱くでしょう。

難病でも、年老いても一緒にこの社会の仲間として生きていこう。私が保ちたい、この価値観は、不十分ながらも制度として実体化されています。 公的医療保険 や 介護保険 、障害者向けの 介護サービス だってそうです。生きていようと思えるためには、社会という環境が重要なのです。

一方で、私はどんな状況下でも、生命を延ばせるだけ延ばすのが良いとは考えていません。

例えば人生の最終段階では、無理に生命維持をしない方が心身の負担を和らげ、本人らしい最期を迎えられる場合があります。医療現場では 胃ろう や透析、点滴などを差し控えたり、終了したりします。あくまでも医学的判断をベースに本人の人生理解や価値観に基づき、本人の最善を考え、本人を中心に関係者が合意した選択であるべきです。本人と関係者の間で合意に至らない場合では、本人の明確で、持続的な意思に反する生命維持の強行はできません。

では、今回の事件の場合、そうした合意を得た上でなら積極的に「死なせる」ことができたでしょうか。いいえ。本人の価値観による選択でも、「一緒の仲間として生きていく」という社会の価値観から肯定できないことが時にあります。「ですから、もう少し私たちと話し合ってくれませんか」と本人に語りかけるのが望ましいと考えます。（聞き手・久永隆一）

＊

専門は臨床死生学、哲学。東大特任教授などを経て現職。「医療・介護のための死生学入門」（共編著）など。

■時には世界を感じるだけでも　作家・歌手、ドリアン助川さん（５８）

事件で亡くなった女性が対峙（たいじ）した苦悩と絶望を思うと、（自分の殺害を依頼した）彼女の気持ちがわからないわけではありません。ただ、社会に何らかの働きかけをして生きてこそ人間だという社会の空気が彼女を追い込んでしまったのではないかと思うのです。

社会に役立つために仕事をしたい、お金をもうけたい、偉い人になりたい。そうした価値観を否定はしません。でも、ひとの命はそれだけでは語りきれない。

重要なのは、関係のなかに自分の存在を見いだすこと。「積極的感受」と言っているのですが、人間はこの世を目撃し、感受する者として存在するというとらえ方です。木、鳥、太陽、音、光、ひと、人工物など世界のすべてを、見たり、聞いたり、感じたりして関係を持つことに生きる意味はある。

仕事も収入もなかった４０歳のころ。同年代の勤め人より稼がなくては、名を世に出さなくてはという気持ちがあった。でもそうではない自分がみじめでした。

アパートの近くの多摩川の河原を散歩していた時、コスモスは風がそよげば踊り、鳥は美しい声を聞かせてくれた。花が美しいと思う僕が、花との関係のなかに確かに存在し、それだけで十分。自分の多摩川だと思った。僕の人生の一部になったのです。人間社会ではダメだけれど応援しているよ、と生命に励まされた感覚でした。

時には社会に役立たなければという意識から解き放たれて、鳥を数えた一日や、星が見えたことが最高だね、と思えることに価値を置く社会であれば、こうしたことが天からの祝福だと彼女が思えていたなら。彼女の気持ちも違っていたかもしれません。

「死にたい」「自分には何もできない」。そんな声がメールでよく届きます。「感受」の話を伝え「明日一日、生きてみよう」と返すと「生きてみます」という返事も来る。体の力が失われることに恐れを抱く難病の人に「社会でできることが減ったとしても、感受できる世界は減らない」と伝えた時は「感じる時間を増やそうと思う」と返ってきた。

学生に本を薦めると、「面白いですか？」と聞かれます。自分で読まないとわからない。生きる意味も、生きてみないとわからない。体が動かなくても、生きることをあきらめる必要はない。みんな、この世を感受し存在たらしめる仲間です。あなたには、きょう、話しかける木はありますか？（聞き手・森本美紀）

＊

明治学院大学国際学部教授。放送作家などを経てバンド、ラジオでも活躍。ハンセン病の元患者を描いた小説「あん」は映画化もされた。